


けやき

令和2年



さいたま市立 大宮北小学校 学校だより

ふたつの「距離」

校長 渡辺 明

ようやく、子どもたちたちが学校に戻ってきました。分散登校という形では6月1日から始まっていましたが、全員が一緒に過ごせるようになってこそ、やっと戻ってきた、という実感があります。もちろん衛生管理上の課題はいろいろあって、これからも「WITHコロナ」の日常を注意深く過ごしていくことになります。これまでがそうであったように、試行錯誤の日々が続くかもしれませんが、子どもたちと一緒に、前を向いて活動していきたいと思えます。

さて、もう何度となく耳にしてきましたが、日常生活で気をつけなければならないこととして、「密閉・密接・密集」のいわゆる3密の防止と、「手洗い」「マスク」の習慣化が大切です。

小学校で児童の様子を見ていると、これらのなかでも難しいと感じるのが、「密接」の回避です。授業中は机の間隔に配慮したり、向かい合って話し合うような場面を避けたりと、様々な配慮をしていますが、何より子どもたちというのは自然と密接な距離に近づいてしまうものなのです。これまでは、おでこがひつつきそうな距離で楽しそうに話している子どもたちの姿を見ると、それはそれは微笑ましく感じたのですが、今やそうとばかりは言えません。適切な距離を取るように声掛けをしながらも、複雑な思いはあります。

さて、適切な距離と申しましたが、一般には「ソーシャルディスタンス(社会的距離)」という言葉が定着しています。しかし、本来ならばこれは「ソーシャルディスタンスング」と呼ぶのが正しい使い方ということです。もともと「ソーシャルディスタンス」という言葉は教育の現場に定着していて、心理的な圧迫を感じない人との距離、というような意味合いで使われます。児童との面談の場面で、リラックスして話せるように距離をとる際に、「ソーシャルディスタンスに配慮して」というように用いられてきました。これに対して、感染予防の視点で物理的距離を保つ際には、「ソーシャルディスタンスング」というのが国際的な表記のようです。



学校現場にとって悩ましいのが、この「社会的距離」と「物理的距離」の違いです。市教委から出ている「学校の新しい生活様式」には、基本の約束として「**友だちとの間を空けよう(心のきよりは縮めよう)**」とあります。制限するばかりでは、目に見える「物理的距離」が「社会的距離」に感じられてしまいます。友だちと一緒に過ごす時間をずっと我慢してきた子どもたちが、ようやく互いの顔を見られるようになった喜びを大切にしながら、心と心の近さを実感できるような指導を心掛けていきたいと思えます。

通常の学校生活も久々です。子どもたちの心のケアが何よりも大切です。講話朝会では、「自粛警察」の話題をきっかけにして、「本物の正しさってなんだろう」というお話をしました。「自分は正しい」という気持ちばかりが積み重なると、そこらじゆめが起ることもある、本物の正しさの中には、優しさや思いやりがあるはずだと、テレビ画面越しではありますが、心を入れて話しました。

物理的距離に勝る心のつながりで、よりよい人間関係を築いていけることを願っています。